

柔瘧には
かるけいしとう
栝楼桂枝湯

方意

柔瘧の主方である。

柔瘧は太陽中風と同じ表虚証で風邪に外感した証であるが、もともと津液不足があつて筋脈が滋潤・栄養されないために、邪は容易に筋脈に侵入する。

方証

太陽中風の汗出・発熱・悪風・頸項強痛という証候を備えたうえに、さらに全身の筋肉が緊張してこわばる感じがする。

弁証の要点：

- ①全身の筋肉のこわばる感じ。
- ②表証だが脈は浮ではなく沈遅。
- ③舌・腹に特別な所見はない。

方解

君薬：栝楼根（2.0g） 苦・甘，寒。清熱生津・滋養筋脈・舒緩筋肉。

臣薬：桂枝（4.0g）

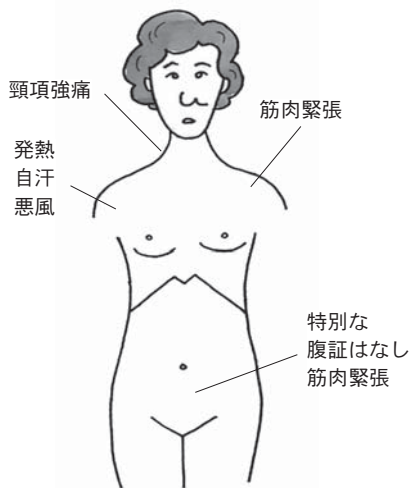
佐薬：芍薬（4.0g）

甘草（2.0g）

使薬：生姜（4.0g）

大棗（4.0g）

桂枝湯
散風解肌と榮衛調和の働きで解表解肌。



臨床応用

破傷風初期・発熱性疾患・熱性痙攣の初期など（剛瘧の主方は葛根湯）。

『脈経』とは三世紀に晋の王叔和が著した中国最古の脈学の書物で、中味は『内経』『難経』やささらには張仲景の書なども研究して書かれています。『金匱要略』とは時代が前後しており、原文に入るはずがないので、この条はまったくの間違いです。多くのテキストではこの条は除かれています。それに「堅」という脈状は現代に伝えられている脈のなかにはありません。

条文 二—12
「柔瘧の証と治——栝楼桂枝湯」

脈経ハ云ウ、瘧家其ノ脈ハ伏堅、直上下スト。

条文 二—11
「瘧病の脈——『脈経』は？」

これは第6条の瘧家と同じで、灸による化膿創がある病人は常に膿性の分泌物を出していて、ただでさえ津液が不足しているうえに、瘧病の風邪と灸の火邪が一緒になると、津液の損傷は助長されるので、当然その瘧病は難治になります。

太陽病、其ノ証備ワリ、身体強バルコト几几然トシテ、脈反テ沈遅タルハ此レ瘧為リ、栝楼桂枝湯之ヲ主ル。

栝楼桂枝湯ノ方

栝楼根二両 桂枝三両 芍薬三両 甘草二両
生姜三両 大棗十二枚

右ノ六味、水九升ヲ以テ、煮テ三升ヲ取り、分力チ温メ三服シ、微力ニ汗ヲ取レ。汗出デザレバ、食ノ頃熱キ粥ヲ啜リテ之ヲ発セ。

柔瘧の証と治方を述べています。

太陽中風の証（頭痛・発熱・汗出）が出揃い、そのうえで体が几几としてこわばる者は、『傷寒論』では桂枝加葛根湯の証です。几几然とは、水鳥が飛び立つ時に首を真つ直ぐに伸ばしている有様を表現した言葉です。しかしここでは脈は浮でなく沈遅であるので、これは太陽中風とは異なり、外感の風邪と体内の津液不足によって体表の営衛が不和であるうえに、筋脈が滋養通潤されないため、身体が硬直して項背部もこわばって真つ直ぐに見えるもので、表虚証の瘧病である